

(第3種郵便物認可)

うるおいプラス



山地 竜馬

私が口永良部島に移住するきっかけになったのは、初回にも書いたが「ヨットマン」という親父との出会いだった。島のみんがなぜそう呼ぶのか、と疑問に思っていたら、本人も自分をそう呼んでいた。

50代で、真っ黒に日焼けし、いかにも南国の漁師という風貌。漁のほか、民宿を営んでいる。私が暮らす住民10人の湯向集落で区長も務めていて、かつてこの集落にあった分校の最後の卒業生でもある。

島に来た4年前、私はどうやったら暮らしていけるか悩んでいた。牛の世話をしながら、この島が畜産を中心に栄えてきたことを知り、ある日、ヨットマンに

「牛飼いに資格はいるの?」と聞いてみた。彼はあっさり「誰でも飼えつとよ」と答え、二つ返事で農地を貸してくれた。私は今、母牛とその子牛の計6頭を飼っているが、まず母牛が飼えたのもヨットマンの後押しがあったからだ。地縁も実績も資金もない私に対し、周囲は決して温

かくはなかった。「前例がない」「口永良部島では難しい」「やる気があるならうちに来た方がいい」「素人にしてはどうか」。数人いる農家のうち一番若いヨットマンだけが「肥育農家と協力して口永良部島のブランド牛を作る」と理想を語っていた。私はその理想

を現実にしたと思った。島の歴史を調べていたとき、たまたま数十年前の町報にヨットマンの記事を見つけたことがある。農家の有力な若手の一人として紹介されていた。「牛をたくさん増やしていきたい」。今の私と同じ、30歳前後だ

ヨットマンの生き方

いころの夢と希望をまだ持ち続け、困難な課題に挑戦しているように見えた。しかし今の彼に、それを感じることができない。数頭いた母牛を全て死なせてしまったからだろうか。

「若者が島で夢に挑戦する仕組みを作りたい」と語る私に、ヨットマンは「何

という現実の厳しさがあるのではないかと思う。島に来たころ、ヨットマンの自宅を訪ね「本業は何なの?」と聞いたことがある。彼は壁を指し「全部よ」と言った。「牛・宿・漁・

走」と自分で書いた紙が張られていた。丸ごと生きる。そんな生き方、働き方に、私は引かれる。(鹿児島県屋久島町在住、一般社団法人「へきんこの会」代表理事)



伊勢エビの刺し網漁のついでに、ヨットマンは素潜りで夜光貝を拾い上げてきた